

これも正確ではないが嶋本昭三先生が中東の方へ旅行し穴の住居のことを当時の美術手帖（或は別の）に発表したこと何処かの雑誌で、具体の、それは吉原先生自身だったのか、その辺はさだかではないが、私の相談にはいつも嶋本君がいるといったような記事を読んだ記憶がある。いまから思えば嶋本先生は私と同年配であるが、すでに当時の東京の団体展では吉原先生の二科での活躍のように頑張っ、その厚い新聞紙を切りさいた記事が、何処かの新聞雑誌に掲載されたのだろう。でなければ、こうして私が記憶しているはずがないのである。いまでこそ吉原治良先生といえば、私も二科にヒラ出品していたが具体という名称とともに、その名前をおぼえていったという具合で、私にはやはり岡本太郎先生の名前が輝いていたので、こりゃ、嶋本先生と吉原先生とはゴブゴブじゃないか、吉原先生が年配だから嶋本先生たちが、たてているのだなあと思っていた。私は実際を知る手段は当時も今もない。あえて言えば当時の作品では私は比較的嶋本先生の作品の印象を強くおぼえていることになるのであろうか。

私は具体が東京産と違うという意味に興味を持ったのも事実であった。そしてこれもいまでは、何で読んだのか、具体の芸術は大阪商法だが、文化は東京で売りだすというのが、大阪商法だということで、大阪での展覧会より東京での展覧会に力をいれた、こんなやり方も、実は大阪的やり方だという記事であった。そして京都での具体展を見た時、それは尋常ヨーイナラザル・エネルギーを感じ、キットすばらしいオダテの術を知っている人がいるのだろうと思った。オダテと言って悪ければセンドウ者でありアジテーターである。誰しも群れる、それが例え親であり、子供だとしても、それ等にとっては火つけ役がいるし、誰かが思い付けば、その環境の中ではアイデアは倍加して爆発してゆく、まさに京都での具体展はトラックをつらねてイサマシク京都に乗り込んできたという気迫がマザマザと感じられ、その膨大なエネルギーに圧倒されたことを今でも思い出す。ひとりひとりの個性なんか問題する方がオカシク、グループの、必然の嵐が巻き起したエネルギーが満々ていて作品の個性など、はるかに超えたところでその爆発は最高によかったのではないか。そういう渦の中からキタエラレタ、ひとりひとりの作家が巢立っていったのであろう。その時、人はその作品で評価する。その評価は正しく異存はない。しかし、もし、その巨大な渦巻きのエネルギーに洗礼されていなければ、その作家が、どんな立派な作家であろうとも決して「あの特有の具体的作家」には生長しなかったであろうことも、また確かなことである。